

集合的記憶理論における文化機関の位置付け

岩崎 菜々美

「集合的記憶」は、文化や社会において個人間や組織間の相互行為から構成される過去に関する知識や実践を指す概念である。この概念は現代において文化機関（図書館・博物館・文書館）の国際組織からも参照され、その活動目的に組み込まれつつある。このように文化機関は集合的記憶の重要性を認識しつつあるが、依然として文化機関による活動と集合的記憶を関連づけた説明は抽象的である。その原因には、集合的記憶における文化機関についての記述が外縁的なものに留まり、そこに理論的空白が存在していることが挙げられる。この集合的記憶における文化機関の位置付けを詳細に解明することは、文化機関に着目した集合的記憶研究における新たな視座を提供し、現代の文化機関が記憶の保存を担う意義を理論に基づいて説明する上で不可欠である。

本研究の目的は集合的記憶理論における中核的な論者である A. Assmann の著書『想起の空間』において、どのように文化機関が表出しているのかを明らかにしたうえで、その位置付けを詳述することである。研究方法は、質的内容分析ソフトウェア MAXQDA を用いたシングルコーディングと精読である。「図書館」、「博物館」、「アーカイブ」などの文化機関に関する 10 のキーワードを用いて『想起の空間』を対象に文書内検索をしたうえで該当段落に文単位でのコードの付与を行い、コードの分類・昇華によって次元・サブ次元・要素を得た。次元・サブ次元・要素の関連を、分析対象の記述や論理構造と共起関係から分析し、文化機関が集合的記憶理論においてどのように表出しているかについて、館種による役割や機能の違い、他のアクターとの関係とともにその位置付けを詳述した。

研究の結果、文化機関の位置付けを規定するうえで必要な次元として集合的記憶の形態を示す、A. 現在における想起と利用の空間、B. 蓄積的記憶、C. 忘却と、これらに関連付ける D. 現在における必要性が浮かび上がった。そして文化機関は B のサブ次元のメディアを一時的に蓄積するアーカイブに位置付けられた。アーカイブとしての文化機関の主な行為や実践には、記憶の構成と表象、教育、メディアと情動の分離、客観的な監視、革新への寄与などがあった。アーカイブは設置される社会構造によってその公開性が規定されることで、館種によって公開的アーカイブ（図書館）・中間的アーカイブ（博物館）・閉鎖的アーカイブ（文書館）に位置付けられた。文化機関は全体主義的政権では、証拠の提供による権力者の正当化や統一的な記憶を表象することで市民の記憶を抑圧する一方、民主主義的社会ではメディアの蓄積によって多様な集団や市民のアイデンティティを支えることで社会構造の転換に寄与していた。

(指導教員 小泉 公乃)